

第2章 1節

明治時代の里山里海の「村」の構造と生産

中村 俊彦^a・小島 由美^b

^a 千葉県生物多様性センター 併任 千葉県立中央博物館

^b 千葉県生物多様性センター生命（いのち）のにぎわい調査団

1. はじめに

「里山里海」とは、「里と山」、また「里と海」、さらには「里と山および海」などの「里」すなわち人々の住まう場（集落）と周辺の自然環境とが一体となった空間であり、地域の自然環境に根ざした人々の生活・生業及び歴史や伝統の文化を包含する人・自然・文化が調和・共存する領域（景相）としてとらえる（中村ほか，2010a）。このような里山里海は、山間から海岸とその立地環境及び構造的特徴により9タイプに類別され（図1）、いずれもその基本単位はかつての「村」として認識される（中村ほか，2010b）。

「村（むら，そん）」の文字は「木」と「寸」

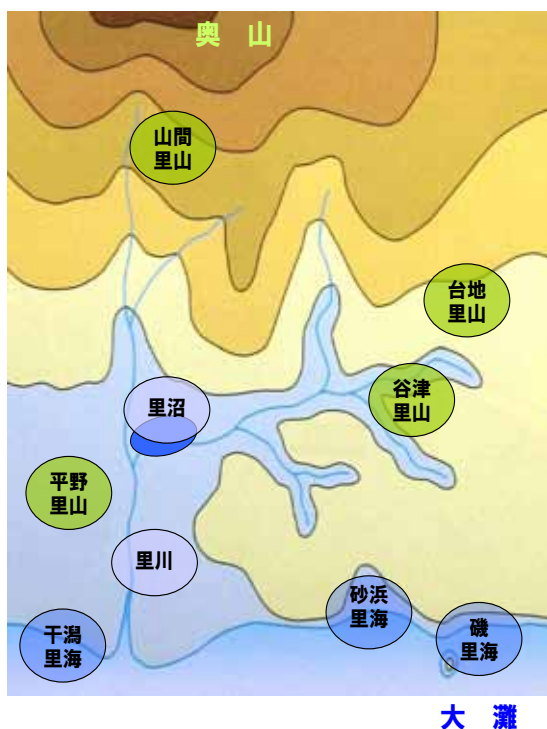


図1 里山里海のタイプと立地環境

から成る。「寸」は長さの単位であり、「短い」あるいは「少ない」であり、したがって「村」とは、「木が少ない、または小さな木のある場所」との解釈もできる。かつての村については「村邑（そんゆう）」の言葉もあり、広辞苑第五版によれば「邑（ゆう）」とは「むら，さと，諸侯の領土，封土（采邑，食邑）」である。

里山里海の基本単位としての「村」について、生物多様性と生態系サービス、さらに人々の福利（well-being）の視点から、その構造と機能を調査分析し、持続可能なシステムとしての村の状態を把握することは、現在の里山里海の課題を整理し、その再興と社会の将来へのシナリオづくりの前提と言える。

日本の村については、考古学や歴史学をはじめ民俗学や社会学からの研究は数多い。しかし、その多くは人間社会中心の調査解析であり、村の自然環境を定量的にとらえ、人と自然のかかわりを生態学的視点から調査研究した事例は少ない。

里山里海のかつての村の姿、土地利用や人口、建物、職業さらには生産等について、明治時代に当時の陸軍によって編纂された村々の記録「偵察録」が存在する。これは、陸軍参謀本部測量課が、明治13（1880）年以降明治27年までの間に、軍用を目的となる全国の縮尺2万分の1地形図を整備する過程で作成した兵要地誌である。「偵察録」には、測量の過程において、現地視察や戸長からの聴取等により得られた地形図に盛り込めない各種の村情報、すなわち土地利用等の自然条件から人々の生活・生業（人口、戸数、建物、社寺、職業、農林水産物等）にかかわる詳細な記録が、村ごとに記

載されている（佐藤，1986）。

この「偵察録」の記録を用いた里山里海の村の調査は、印旛沼周辺の里沼の村についておこなわれている（吉田ほか，2010）。本報告では、この里沼も含め、「偵察録」にある現在の千葉県に位置する村の記録を調査解析し、当時の村を人と自然、文化とが一体となった持続可能な生態系のモデルとしての観点から考察したものである。

2. 調査分析方法

「明治前期民情調査報告『偵察録』」は、陸軍参謀本部が作成し佐藤兎氏の解題で柏書房から1986年4月に発行されたマイクロフィルム資料である。当時、陸軍参謀本部付尉官が、地形図測量に併行して実地調査したペン書きの秘密報告書全252冊約10,000ページが完全収録されている。

この偵察録は、数村から十数村のまとまりで調査されているが、多くの調査項目はほとんど共通である。千葉県の村の記述は「第一部：測量年月・測量者、地名、位置地勢の概略」と「第二部：測量年月・測量者、地名」のほか、各調査地域の「天然物記載」すなわち「土地ノ位置」「土地ノ景状」「山地」「水地」「地質」「大気」「備考」等、また「政記記載」すなわち「人民」「住所」「建築物料」「農事」「森林」「家畜及動物」「工業」「商法」「備考」等であり、また場所によっては「交通路記載」として「陸路」「水路」等の記述もみられる。さらに村ごとの数値情報としては「人口」「戸数」「運輸手段」「職工及び職業」「耕地」「年の収穫」「家畜」「狩猟」「物産」「水車」等に関するさらなる細目の数量が記録されている。

このような偵察録の千葉県の村の記録から、里山里海9タイプのうち砂浜里海を除く8タイプの村を抽出し、その村ごとの全ての数値情報について整理・解析した。なお、里山里海の各タイプとして抽出した村は以下の通りである（図2）。

山間里山：房総半島南部の丘陵地帯、標高

200-300 mの31村（香木原，旅名，奥米，怒田澤，菅野，川俣，石塚，正木，柳城，高溝，宿原，柳川，宇藤原，豊英，岩本，東栗倉，草河原，大久保，四方木，東猪原，黄和田，畑，坂畑，月崎，折木沢，川谷，田倉，蔵玉，怒田，笹村，大坂，大戸見，豊岡）

台地里山：北総台地の標高20-50 mで、明治以降に開拓された12村（初富，二和，三咲，豊四季，五香，六実，七栄，八街，十倉，十余一，十余二，十余三）

谷津里山：房総半島中部の谷津の沖積低地と洪積台地とからなる42村（金剛地村，板倉，奈良，古都辺，瀬又，押沼，中野村，東国吉村，高田，高倉，喜多，六地藏，桂村，吉井村，柴名村，上太田村，下太田村，味庄村，船木村，上野，中野台，大登村，黒戸村，真名村，山之郷，皿木，大椎村，小食土，小中村，萱野村，砂田村，大澤，小山，永吉村，番場，潤井戸村，下野，滝口，荻作村，犬成村，葉木村，大作村，）

平野里山：九十九里平野の標高10 m以下の47村（柳橋，木崎，北飯塚，南横川，北横川，



図2 千葉県内の里山里海の明治時代の村の調査対象地

星谷, 富田, 福俵, 上谷, 下谷, 東中島, 桂山, 九十根, 長國, 北吉田, 南吉田, 千沢, 南日当, 北日当, 法目, 萱場, 小萱場, 関村, 福嶋, 千町, 七渡, 本小轡, 新小轡, 木崎, 谷本, 町本, 高根本郷, 小泉, 曾根, 北高根, 中ノ郷, 北水口, 水口, 岩沼, 七井戸, 六ツ野, 藪塚, 大芝, 金田, 宮成, 信友, 川嶋)

里沼: 印旛沼に面し, 沖積低地と洪積台地から成る 20 村 (公津新田村, 柏木村, 船形村, 下岩橋村, 下根村, 飯野町下根町, 萩山新田村, 山崎村, 戸神村, 先崎村, 土浮村, 江原新田, 飯野村, 鎌刈村, 飯田村, 下方村, 船尾村, 大佐倉村, 白井台町, 酒直村)

里川: 利根川下流域の沖積低地の 23 村 (上座村, 小竹村, 上岩橋村, 台方村, 保品村, 吉田村, 角来村, 大竹村, 松崎村・西側, 白井田町, 北須賀村, 松崎村・東側, 瀬戸村, 師戸村, 笠神村, 吉高村, 平賀村, 酒々井村, 山田村, 白井村, 岩戸村, 安食村, 中川村)

干潟里海: 東京湾に面した沖積低地の村が中心だが洪積台地を含む場合も多い 28 村 (牛込, 湊, 玉前, 岩崎, 畔戸, 久保田, 新井, 瓜倉, 村田, 今井, 谷津, 蔵波, 奈良輪, 青柳, 鷺沼, 濱野村, 欠真間, 西宇喜田, 曾我野, 久々田, 北生實, 中島, 稲毛, 猫実, 堀江, 馬加 (幕張), 検見川, 五井).

砂浜里海: 九十九里浜の村を抽出したが, 記録に不明なものが多く, 他のタイプとの同等な解析はできなかった.

礁里海: 房総半島南部の岩礁海岸に接する 23 村 (早物, 見物, 太夫崎, 香村, 磯, 坂田, 川名, 吉浦, 洲崎, 濱波太, 乙濱, 川口, 笠名, 天面, 波佐間, 忽戸, 岡波太, 平磯, 大川, 千田, 白間津, 滝口, 白濱).

なお, 千葉県域の調査は, 明治 13 年 3 月~17 年 1 月の期間であり, 村の調査対象は, 当時, 立地や土地区画等の面で都市化されていると判断されるところは含めず, 千葉県管内実測図(明治 33 年 3 月校訂, 千葉県発行)により, 里山里海の各タイプの典型的な立地条件にあり, 農林漁業を主たる産業として営まれていると推察される村を抽出した. また, 調査対象の村の面

積については, 里山里海タイプごとに千葉県管内実測図を用い, 図上から算出した数値を用いた.

生産物等の記録で, 「貫目」「石(コク)」の数量が用いられていたものについては 1 貫目 = 3.75kg (液体のものは 3.75 リットル), 1 石 = 150kg として換算し集計した.

3. 里山里海の村の構造と生産

1) 土地面積と土地利用

8 タイプの里山里海の 1 村当たりの面積の平均は 374ha であった. 1 村当たり最も大きな面積は台地里山で 949ha, 次に山間里山の 607ha であった. 最も小さい面積は磯里山の村で 1 村 160ha, 次に平野の村で 182ha であった(図 3).

各里山里海の土地利用については, 林地, 水田, 畑地, 草地(草場, 牧場, 荒地を含む), 塩田の面積割合を図 4 に示した. その際, 里沼, 里川, 里海については土地利用の半分をそれぞれ沼, 川, 海と仮定して図化した.

広い面積を有する山間里山は, その約 4 割以上が林地であり, その他が 2 割以上あり, 残りは, 水田, 畑地, 草地でほぼ 3 等分されていた. 台地里山は, かつての「牧」を主に明治以降に開墾により成立した村々で, 平均面積は里山里海 8 タイプでは最大である. その土地の約 6 割が草地であり, 残りは畑地と林地, 水田

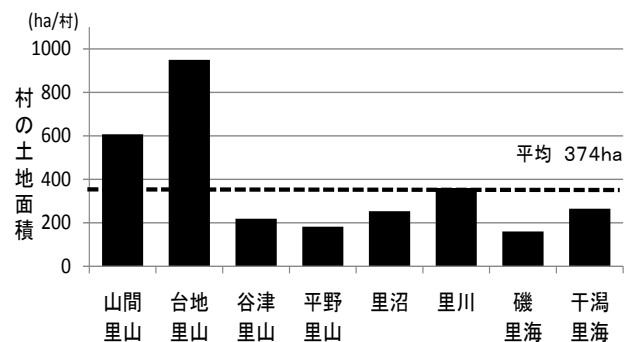


図 3 里山里海各タイプの村の土地面積
面積は千葉県発行千葉県管内実測図
(明治 33 年 3 月校訂) に基づく

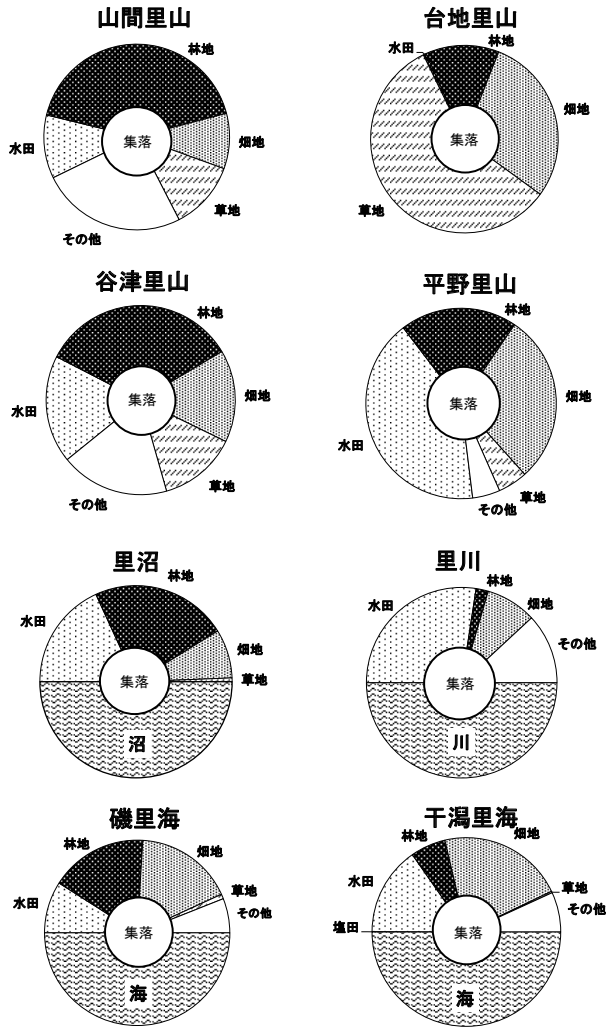


図4 里山里海各タイプの村の土地利用

はわずかであった。平野里山は、1村の面積は182haと小さいが、その半分近くが水田で、畑地が約3割、林地が約2割、さらに1割弱の草地在り。谷津里山は、1村平均の面積は218haであり、その約4割が林地で、水田、畑地、草地、その他の土地がほぼ4等分の面積であった。

里沼の村は面積253haであり、その約5割が林地、他は水田が4割、畑地は約2割であった。里川の面積は360haと里沼より大きく、その約5割以上が水田であり、2割が畑地、林地はわずかであったが、その他の土地が2割以上みられた。

1村当たりの面積が最も小さかった磯里海は、林地と畑地が約3割ずつ、残り2割が水田で、草地在り。干潟里海は1村面積265haであり、約4割が畑地、水田が約3割であり、その他の土地が1割強あり、塩田と草地もわずかながらみられた。

里山里海8タイプの村は、それぞれに立地する自然条件が異なり、いずれも各自然環境を活かした土地利用となっていた。

2) 人口と戸数

里山里海8タイプの村の人口と戸数等の状況

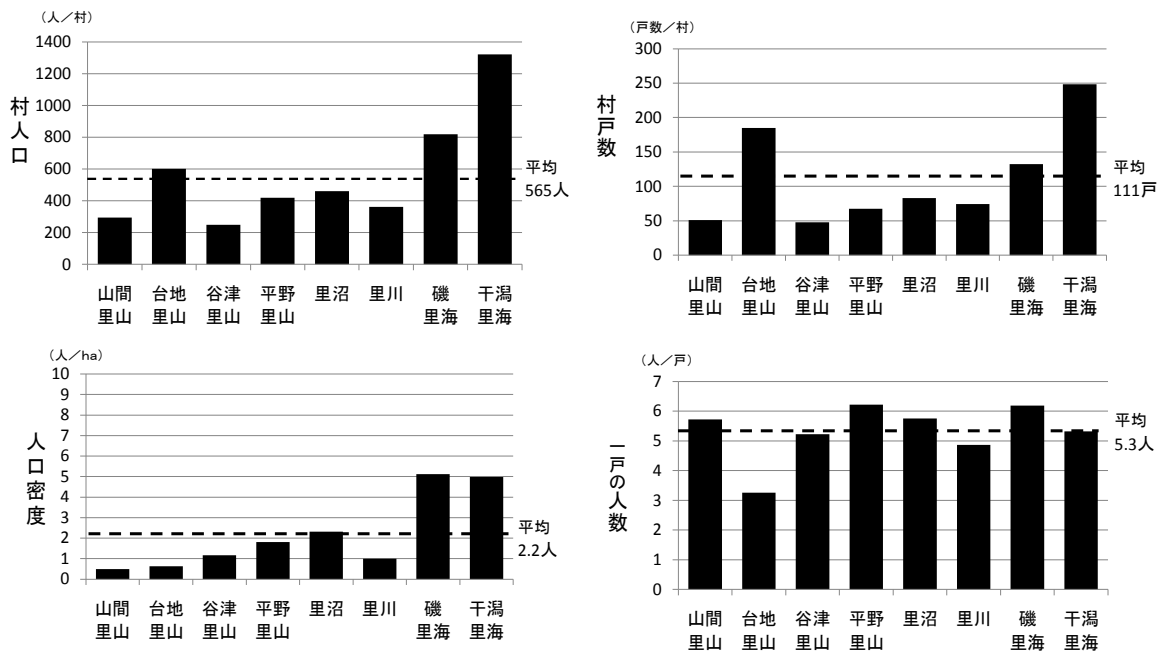


図5 里山里海各タイプの村の人口、人口密度、戸数、一戸の人数

について図5に示した。

1村当たりの人口は平均565人、また人口密度は平均2.2人/haであった。人口の平均で最も大きいのは干潟里海の村で1,321人、次に磯里海の819人、台地里山601人とつづく。平均人口が最も小さい村は谷津里山で250人、そのほか山間里山295人や里川361人も小さい。1村当たり人口密度では磯里海5.1人/haと干潟里海5.0人/haが他に抜きんでて高く、山間里山と台地里山がそれぞれ0.5人/ha、0.6人/haと低かった。磯里海の人人口密度は山間里山の10倍であった。

1村当たりの戸数では、8タイプの平均は111戸であった。干潟里海が最も多く248戸、台地里山184戸、磯里海132戸がつづく。少ないのは谷津里山48戸、山間里山51戸であった。1戸当たりの人数では、平均は5.3人であった。最も多い磯里海では6.2人であり、最も少ないのは台地里山3.3人であった。その他のタイプでは1戸5～6人であった。

村の人口及び戸数の規模別の村の頻度を図6に示した。1村当たりの人口は、150-300人

規模の村が最も多く、戸数では30-60戸規模の村が最も多かった。この傾向は、山間、谷津、平野の里山の村で顕著であり、磯および干潟の里海では、人口・戸数ともにさらに大きな規模の村が多かった。

3) 職工及び職業

村の職工及び職業の人数を図7に示した。職工及び職業の種類が最も多いのは干潟里海の20種類であった。里沼も17種類の職工及び職業が記録されていた。最も少なかったのは平野里山の村で11種類であったが、他の5タイプでは12種類の職工及び職業が記録されていた。

里山里海8タイプの全てにみられた職工・職業は、大工、桶工、杣工(木こり)、医師及薬剤手であった。大工は各タイプともに1村当たり1～3人が存在した。杣工は山間里山で1村に2人以上だが、他では1村1人程度であった。桶工は、磯里海と干潟里海では1村1人以上であったが、他では2～3村に1人程度であった。医師及薬剤手は干潟里海で1村1人以上であっ

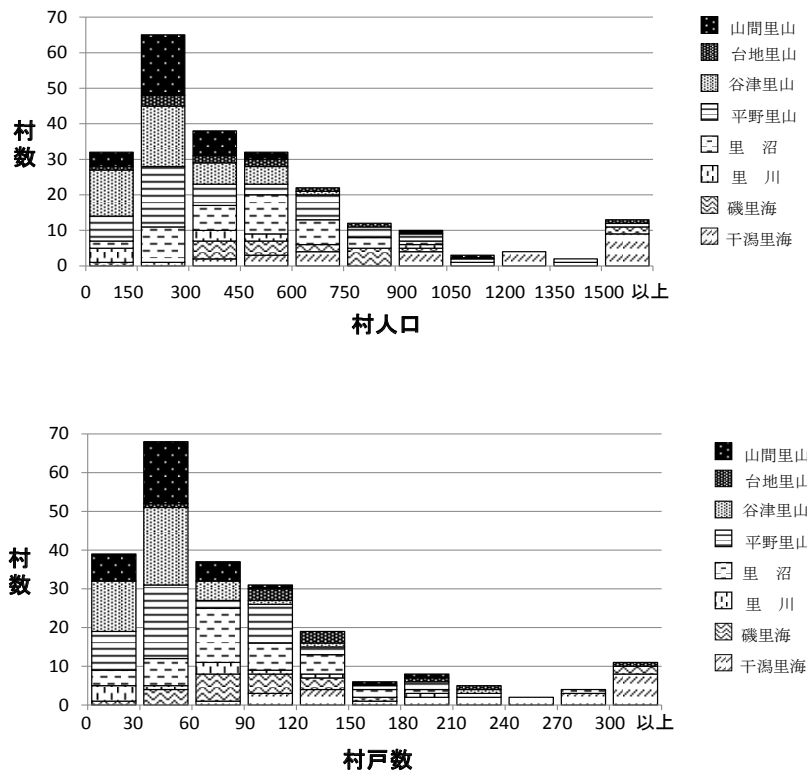


図6 人口および戸数規模別にみた村数の頻度

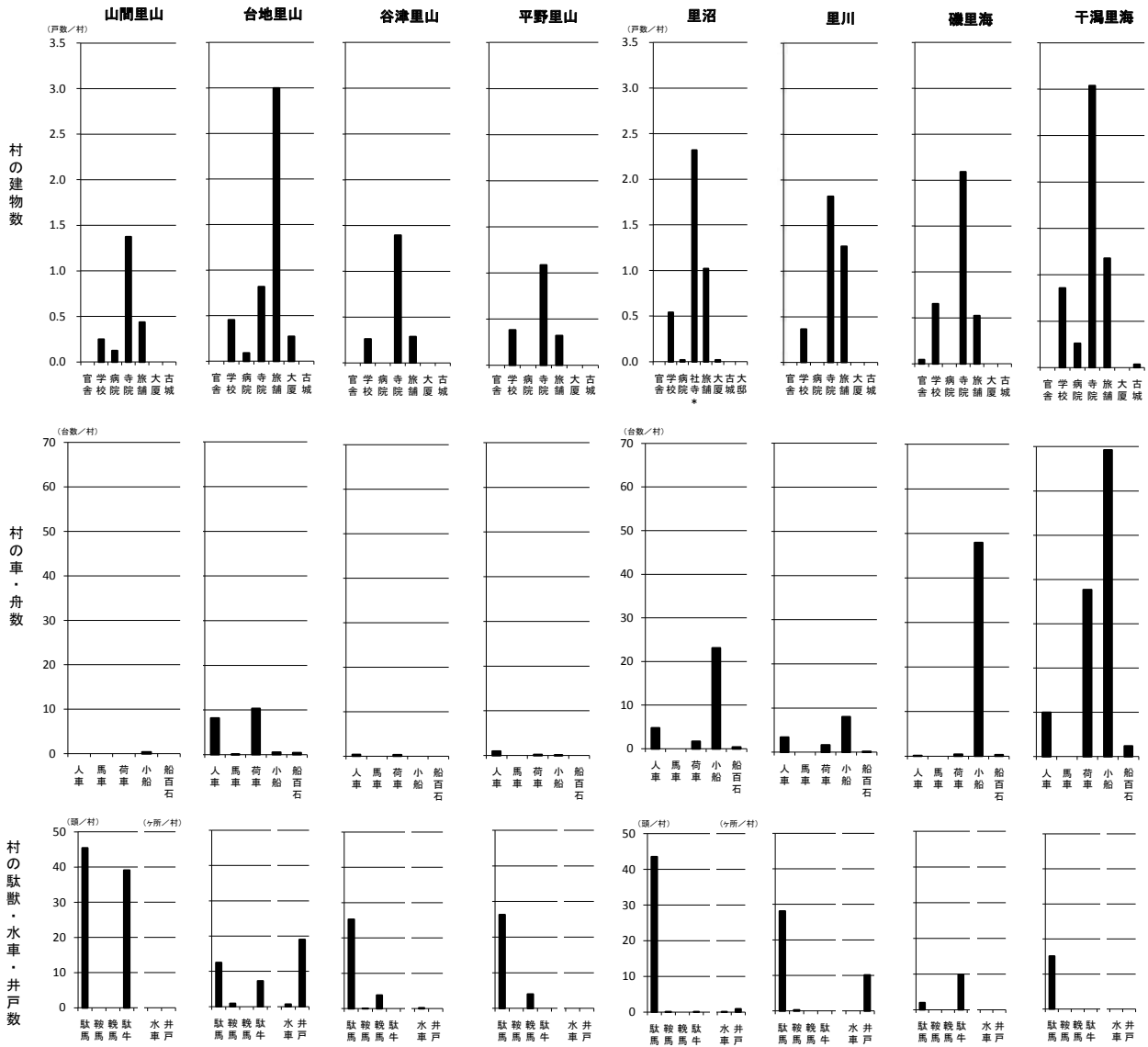


図8 里山里海各タイプの村の建物等の施設・設備

約1頭有していた。山間里山では駄牛が多く1村平均で39頭有していた。また磯里海と台地里山でも1村それぞれ10頭、7頭の駄牛が記録されていた。

井戸と水車の記録が散見されたが、台地里山では約20の井戸が記録されていた。

5) 木材・藁等材料品と薪・炭等燃料

木材・藁等の材料品と薪・炭等の燃料の生産量を表1に示した。

各里山を中心に藁や秣の生産があった。藁は干潟と磯の里海、山間と平野の里山では1村40t～90t以上の生産が記録されていた。秣は

表1 里山里海各タイプの村の材料品・燃料の生産

類別	品目	山間里山	台地里山	谷津里山	平野里山	里沼	里川	磯里海	干潟里海
材料品 (村)	藁(kg)	62,464	8	600	40,984	—	—	40,691	92,428
	秣(kg)	110,235	19	95,299	3,439	—	—	—	721
	綿(kg)	—	—	450	1,133	311	—	—	49
	茅(束)	—	—	—	2,105	—	—	—	—
	松板(束)	—	—	—	11	0	—	—	—
	杉板(束)	—	—	—	15	0	—	—	—
	木材(束)	—	—	—	—	46	—	—	—
燃料 (村)	竹材(束)	—	—	63	29	1	—	—	36
	薪(kg)	28,763	136	34,861	27,469	27,000	—	—	139
	炭(kg)	15,456	—	31,494	1,049	1,159	3,409	—	27
	菜種(kg)	—	239	—	—	3	—	—	—

山間里山で1村110t、谷津里山でも95tと多かった。綿が平野里山のほか谷津里山と里沼さらに干潟里海でも生産され、茅は平野里山のほか谷津里山、里沼でも生産されていた。平野里

表2 里山里海各タイプの村の食料品の生産

類別	品目	山間 里山	台地 里山	谷津 里山	平野 里山	里沼	里川	磯 里海	干潟 里海
穀類 (ノ村)	米	28.1	32.5	51.1	38.3	77.0	85.9	21.2	135.0
	大麦	17.3	4.3	15.1	17.0	36.9	10.8	23.8	46.6
	小麦	3.4	24.9	5.1	2.0	8.0	15.0	3.5	36.4
	雑穀	9.5	18.1	7.1	9.2	180.5	11.3	7.0	34.3
	琉球薯	11.0	17.9	1.0	-	-	-	-	1.4
	馬鈴薯	54.2	35.3	2.5	9.2	5.9	0.3	12.2	16.4
農産品 (ノ村)	煙草 (kg)	94	-	-	-	-	-	-	-
	茶 (kg)	6	341	12	120	310	-	-	-
	柿 (kg)	64	-	-	-	-	-	-	-
	蜜柑 (円)	-	-	-	23.7	-	20.9	-	-
	大根	-	-	-	23.3 (円)	4.0 (駄)	-	-	-
	蓮根 (kg)	-	-	-	-	-	-	-	1,473
食用禽 (ノ村)	大豆等(kg)	-	-	-	-	-	157	-	-
	牛	2.8	-	-	-	-	0.5	-	-
	豚	-	0.2	-	-	-	-	-	7.7
鳥獸等 (ノ村)	鶏	281	247	180	300	324	179	58	590
	家鴨	3.0	-	0.4	3.1	2.1	0.9	-	22.1
	鹿 (頭)	2.8	-	-	-	-	-	-	-
魚貝等 (ノ村)	山獣 (頭)	4.9	-	-	-	-	-	-	-
	鳥類 (円)	-	-	-	-	-	5.4	-	0.7
	鶏卵 (kg)	-	-	41	-	-	-	-	-
	鮎 (kg)	2,965	-	-	-	-	-	-	-
	鱒 (kg)	23	-	-	-	-	-	-	-
	鱈 (kg)	14	-	-	-	110	-	-	-
	鯰 (kg)	-	-	-	-	1,854	-	-	-
	鮒 (kg)	-	-	-	-	542	341	-	-
	鯉 (kg)	-	-	-	-	1,691	9,886	-	-
	鮭 (kg)	-	-	-	-	-	9,205	-	-
	貝類 (樽)	-	-	-	-	-	-	-	500
	海老 (kg)	-	-	-	-	86	-	-	-
	漁収穫(kg)	1,523	-	-	4	8	341	-	3,183 (籠)
海藻 (kg)	-	-	-	-	-	-	141,195	-	
干鮑 (kg)	-	-	-	-	-	-	-	18,653	
干魚等(kg)	-	-	-	-	-	-	-	677,224	
物産雑 (ノ村)	-	-	-	-	-	-	-	-	2,271 (籠)

山と里沼では板材が生産され、谷津里山及び平野里山、また干潟里海では竹・竹材の生産記録もあった。

薪・炭の生産は里山を中心におこなわれていた。薪・炭ともに谷津里山で最も多くそれぞれ薪は約35t、炭は約31t生産され、薪は山間里山、平野里山、里沼がつづき、また炭も山間里山、里川、里沼が谷津里山につづいた。さらに台地里山では燃料用の菜種も生産されていた。

6) 食料・食品、嗜好品の生産

食料・食品については表2、表3、図9に示した。

食料・食品において全ての里山里海での生産がみられるのは、米、大麦、小麦、サツマイモ、鶏、そして雑穀であった。米の1村あたりの生産が最大であったのは干潟里海で135tであり、つづいて里沼79t、谷津里山51tとつづき、最も少なかったのは磯里海の21tであった。干潟里海では、大麦47t、小麦36t、雑穀34tの生産が里山里海8タイプでそれぞれ最も多かつ

表3 里山里海各タイプの村の嗜好品の生産

類別	品目	山間 里山	台地 里山	谷津 里山	平野 里山	里沼	里川	磯 里海	干潟 里海
嗜好品 (ノ村)	酒 (ℓ)	614	-	1,858	9,246	4,040	2,959	470	5,164
	濁酒 (ℓ)	127	-	380	278	-	-	98	257
	焼酎 (ℓ)	-	-	96	265	-	-	-	166
	麦酒 (ℓ)	-	-	-	-	-	-	-	214
	雑酒 (ℓ)	-	-	-	19	-	-	-	-
	油 (ℓ)	42	-	189	1,443	729	68	261	2,084
	醤油 (ℓ)	281	-	289	2,151	9,708	6,273	13	4,066
	砂糖 (kg)	-	-	93	-	-	-	-	-
	塩 (kg)	※1	-	-	64	-	-	-	27,145

※1 塩の記録があるが誤記載と考えられる

た。干潟里海に続くのは、大麦は里沼で35t、小麦と雑穀は台地里山でそれぞれ小麦25t、雑穀18tの生産量であった(表2、図9)。

琉球薯(サツマイモ)は山間里山と台地里山が多く、1村平均はそれぞれ山間里山54t、台地里山35tであった。台地里山と山間里山ではそれぞれ18t、11tであった。また(馬鈴薯)ジャガイモは台地里山、山間里山で生産され、それぞれ1村当たり18t、11tであった(表2、図9)。

その他の農産物(表2)では、台地里山をはじめ里沼や平野里山では茶の生産がみられた。山間里山では煙草と柿、蜜柑が平野里山と里川、大根が平野里山と里沼、また蓮根が干潟里海で多く生産されていた。食用禽では、牛が山間里山、豚が干潟里海、また鶏については、干潟里海が1村当たり590羽であり、つづいて里沼324羽、平野里山300羽となる。また家鴨が干潟里海で1村22羽のほか平野里山、山間里山、里沼でも生産されていた。鳥獸等については、鹿と山獣が記録され、里川、干潟里海では鳥獸、なお谷津里山では鶏卵の記録がある。魚貝等については、山間里山では鮎のほか鱒と鱈などの漁獲があった。また里沼、里川では鯉、鮒、さらに鮭と鯰、海老が里沼、鮭が里川で記録されていた。また磯里海では、大量の干魚、干鮑、その他の漁収穫品が記録され、干潟里海の村では漁収穫と貝類のほか物産雑が大きい。

嗜好品(表3)では、台地里山を除く各地で酒、油、醤油が生産されていた。谷津里山と平野里山また干潟里海では濁酒、焼酎の生産があった。そのほか山間里山と磯里海でも濁酒、また麦酒が干潟里海での生産の記録もあった。干潟里海では大量の塩の生産がみられた。

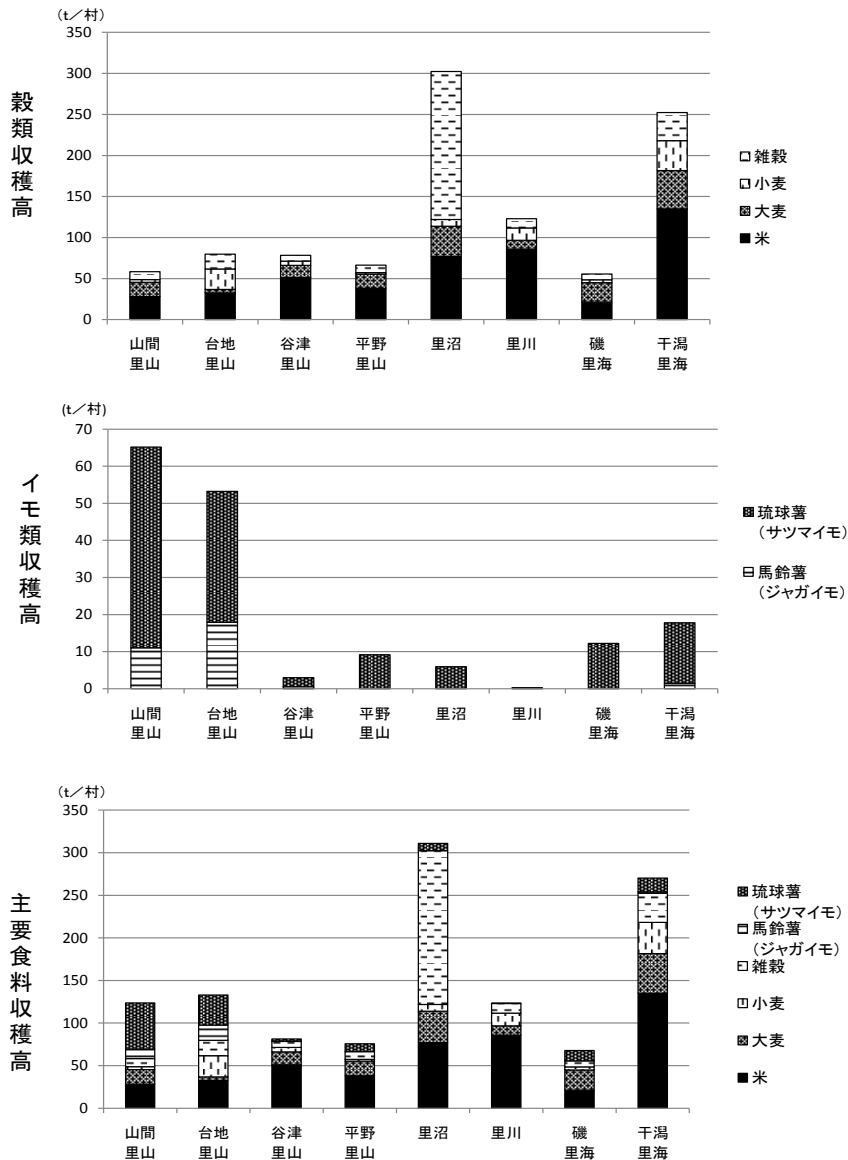


図9 里山里海各タイプの村の主要な食料の生産

4. 人間社会を持続させる領域としての村

人が生きていくためには、自然の恵みである水や食料、またそれを加工し、暖をとるための燃料、そして衣類や家屋をつくる材料も必要である。このような自然の恵みを得つつ天変地異の自然災害の危険を回避していくには、人はひとりでは生きていけない。少なくとも家族の力、また家族だけではなく、多くの人々が力を合わせた助け合い、分かち合いのシステムが必要となる。村については、行政区画の集団単位としての「行政村」と、人々の生産構造の社会

的結合の単位としての「共同体」の村があり、さらに最小の地域的統一単位の「基礎地域」としての性格もある（山澄，1982）。ミクロな地域集団の「垣戸」については、開墾地から屋敷地、さらに同族集団から地縁集団に至るその成因と変遷が研究されている（直江，1958；直江，1960）。

1) 集落形成と村の規模

狩猟採集の生活の縄文時代では、海岸や水辺を中心に、5-6軒で20-50人、多くて100人程度の集落が形成されていたと推察されている（松木，2007）。現在でも世界各地には狩猟採

集の生活をしている人々が存在する。南米最後の先住民と言われるアマゾン奥地の原生の森に生きるヤノマミ族の人々は、食料の調達から生活・文化まで自然に依存し、生活の糧としての自然を求め移動生活をするが、その集団は30人～200人規模で、原生自然のなかに分散している(国分, 2010)。

18～19世紀の日本の平均的な村は、村高400～500石、耕地面積50町(ha)、人口400人ぐらいであった(渡辺, 2004)。また、房総半島では、明治5年の1村当たりの平均戸数は、安房92戸、上総68戸、下総69戸との記録が残されている(山澄, 1982)。今回の里山里海の村の解析では、8タイプ平均での1村の人口、戸数ともこれらの値を上まわっていた。

平均値ではなく、村の出現頻度においては、1村当たりの人口では150-300人規模の村が最も多く、戸数では30-60戸規模の村が最も多かった。日本では、狩猟採集の縄文時代の村から弥生時代には米作を主とする定住化の村が形成されたが、大化改新後の律令時代には、国郡里制が引かれ、行政区画の基本単位として里を50戸とした。しかし、その後の715年の郷里制により、約50戸のまとまりは郷とし、里はそれより小さな自然村にあてられた(早川, 1974)。現在の里山里海の村の姿も、その自然とのかかわりや規模についても、この郷里制の時代と本質的に変わらぬ村の原点が存在したと推察される。

人間の集団としての規模については、ゴリラやチンパンジーの類人猿の群れが50-60頭であり、またそれが毛づくろいができる範囲で保たれていることから、ダンバー(1998)は、言葉を持ち大脳新皮質が発達している人間の集団としての適正規模を150人と見積もっている。彼はその裏付けとして第二次世界大戦の各国軍隊の中隊が130人～223人であることや、初期農耕民の村人口が約150人であること、さらに北米のキリスト教のコミュニオンが150人を単位としていることなどをあげている。

人の共同は人が多ければ多いほど集団は大き

な力になっていくと考えられる。しかし自然のなかでの暮らしには、多くの人の生活を支える資源・エネルギーに限界が生じるとともに人と人との信頼関係の継続にも限界があると考えられる。すなわち類人猿の毛づくろいと同じように、人の信頼関係の確保には対話などのコミュニケーションが必要不可欠であり、人間生活にはそのコストも欠かせない。したがって人ひとりが信頼関係を基にして持続的に共同できる相手は150人～200人と推察され、それを越えれば互いの信頼は薄れ、恒常的に集団を保つ機能、言わば接着力が弱まるとも考えられる。

自然との調和・共存を前提とした人間社会の基本構造としての村においても、人口の面での規模の制約があると考えられる。村の人口を賄う自然の領域は、その自然環境の生産力によって空間規模は異なってくると考えられる。生産性の低い自然環境ではより大きな領域が必要になる一方、生物多様性が豊かで安定した生態系の地域ではコンパクトな領域の村が形成されると考えられる。

里海や里沼では、村の人口及び戸数ともに大規模化し人口密度も高い状況がみられた。これは陸域の里山の村に比べ、里沼や里川、里海の村では、水域を兼ね備えるとともに陸域と接する水辺の環境が生物多様性の高い空間であり資源面でも生産性豊かであるためと考えられる。さらに水域を通じて交通の便が良く、里山に比べより外部資源を取り込みやすい条件が整備されていたためと考えられる。

2) 自然条件を活かした多様な里山里海の村の営み

日本の明治時代の村々は、江戸時代の長い鎖国政策のなかで培われた自給自足の村の姿が色濃く残されていたと推察される。資源・エネルギーの自立循環はもちろん、年貢も課せられた状態で、領域内で自然の恵みを持続的かつ効率的に引き出す技術や文化が求められた。

里山里海に限らず世界中の村の共通の要件として、人が住まう集落とともにそのまわりには食料生産の場としての田畑があり、衣食住のた

めの燃料や材料を調達する草地や森林、また水源の泉や湧水も必要不可欠な存在であった。さらに家畜や家禽も共通に飼われていた。そして房総半島の里山里海の村に共通の要件として、今回の調査解析で明らかになったものは、米麦、雑穀に馬鈴薯の栽培、また農耕用の駄馬や食料及び農業肥料のための鶏の飼育があげられる。さらに酒や油、醤油の生産もほとんどの里山里海で行われていた。里山里海の各村には必ず寺院（社寺）が存在し、また2～3村では学校や旅舗も存在した。また職業・職工としては大工が1村1人確保され、また数村で1人の桶工、杣工（きこり）、医師及薬剤手も確保されていた。まさに生まれてからの衣食住と生活生業、またその間の教育や旅行、さらには人生の終焉まで、自然環境及び社会環境ともに全ての施設・設備が村の基本インフラとして備わっていた。

房総半島千葉県は、長い海岸線や河川に囲まれ、平野と台地、房総南部の丘陵地に至る多様な自然環境が存在し、また湖沼や小河川の豊かな水環境とともに海岸の平野や谷津から台地、丘陵にかけては多様な地形と豊かな土壌環境も有している。このような極めて多種多様で豊かな自然の一員としての人々の暮らしのなかには、各地の立地の特性に応じた土地利用とそれを活かした日々の生活・生業が培われてきた。

傾斜地が多く集落の立地にも制約の多い山間里山であるが、人々はその広大な森林を活かした生産を生活の糧としてきた。杣夫や木挽の職人を有し、薪・炭のほか秣や藁も大量生産していた。耕作には不向きなその自然条件は、穀類生産は多くないものの駄馬、駄牛を用いた農業で流球薯や馬鈴薯の生産、また煙草や柿の収穫もあった。さらに河川からは鮎や鱒、鰻等の漁獲も大きかった。

一方、海に面した干潟里海では、場所によっては水田、畑地、草地に加え塩田もつくられ陸域の豊かな麦作や米作のほか秣生産も大きかった。もちろん多くの小舟や荷車と舟子を持ち、猟師や漁夫による貝類をはじめ様々な海産物の収穫があった。このような干潟里海の陸域から海域までの自然の恵みの大きさはそのまま大き

な村人口の支えになったと考えられる。

そのほか、台地里山の村では流球薯や馬鈴薯の生産を軸に広大な荒野の開墾に挑み、谷津里山の村ではその林地、草地、畑地、水田の土地利用のバランスの良さにより、食料から薪・炭の燃料まで多様な生産力をそなえていた。平野里山では豊かな米生産を基に酒づくりが活発であった。里沼では、鮎や鯰の水産資源だけではなく米麦の他雑穀の生産によって大きな食料生産を担っていた。里川の村では、鮭、鯉の川魚のほか米を基に醤油や酒作りを行っていた。そして磯里海の村では、その漁業資源により漁夫や猟師による干物の生産を突出させた。以上のように、かつての里山里海の村の生活・生業はその自然環境を十分にふまえ、その恵みを最大限活かした生活・生業を展開していたことが見て取れる。

3) 自然のなかでの人の存在を持続させる文化

人が豊かに生きるためには多くの資源・エネルギーが必要になる。しかし限られた自然のなかからの総量には限界がある。この限界を見極め、その将来の持続性を見据えた資源利用によって村の存続がはかられてきた。自然のなかでの人のくらしを持続させる文化とは、自然を知りその恵みを効果的に利活用する知恵や技術、また自然の恵みの限界を見極め我慢しながらも互いに助け合い・分かち合う仕組みと言える。

かつての村には、家々が互いに助け合う「結い」や「講」の組織があった。「結い」は田植え組など主に農作業の互助組織であり、「講」は庚申講、念仏講、観音講、子安講、三山講、富士講などそれぞれ信仰の集まりとしてつくられた団体であるが、その内容は農耕儀礼から葬儀までの行事の協働や親睦・娯楽の集まりとしても機能していた。さらに「無尽（むじん）」や「頼母子（たのもし）」と言った何件かの家が掛け金を出し合って金融面の互助組織もあった（千葉県史料研究財団、1999）。

村の土地利用においては、林地の入会地とその共同管理・共同利用の入会組、また水利

用に関しては水組といった共有資産また公共財産の管理・利用の仕組みが存在した（山澄，1982）。

村の掟に背けば村八分の制裁もあったが、よほどのことがないかぎり、決してその村人の存在を否定するものではなかった。さらに、借金にしても、基本的に利子の概念はほとんどなく、返金が滞っても元本返却で村の一員に復帰できたという（渡辺，2004）。まさに、家族愛から、血縁やおもい、人の利害も超えた「地縁」で結ばれた助け合い、分かち合いのセーフティネットが完備されていた里山里海における村社会の文化であったと言える。

5. おわりに（景相単位としての村）

現在、世界的に地域住民と外部世界の人間が資源の獲得と利用をめぐる対峙する事態が顕在化しているが、この解決には、これまでの市場経済の競争原理に基づく土地や資源の自由な利用ではない、むしろ互いに共有する「コモンズ」の有り様が注目されている（秋道，2010）。里山里海の持続可能な生態系管理においても、民有地と公有地の両方を管理するランドスケープの視点で制度を設計する新たな「コモンズ」の創造が求められている（日本の里山・里海評価，2010）。

各里山里海には、人と自然、そして文化とが一体となって互いに調和・共存する生態系としての「景相」（沼田，1996）が展開されており、その基本単位すなわち「景相単位」としての村の構造と機能は、生態系サービスを持続可能にさせるシステム領域のモデルであったと言える（中村，1999；中村，2004）。資源の共有地・共有システムとしての「コモンズ」は、まさに景相単位としてのかつての里山里海の村の中には、当然、包含されていたといえる。

里山里海の村は、人のくらしが立地環境に調和していくプロセスの結果として、生物はもちろ自然と文化の多様性を内在させていった。このような村々は、それぞれの領域の特色を活かして生産に結びつけ、村の間の多様性を高め

るとともに互いの交流・交易のネットワークを構築・拡大していった。山の水源の森からは河川を通じて、淡水をはじめミネラル・養分が海岸・海域にもたらされ、人間活動においても里山の村の産物は衣食住や燃料として里海の村々に供給された。そして海域からの多様な海産物は内陸の食料や肥料として運ばれた。「景相単位」の村から「流域単位」の地域としてのつながりが形成され、人々の暮らしをより豊かにまた持続的なものにしていった。

生物多様性と生態系サービスを基盤とする持続可能な社会を目指すとき、日本の里山里海のかつての村から学ぶべきものは多い。

「偵察録」は他に類例のない極めて貴重な日本の里山里海資料である。これには当時の村々のようすについての膨大な概括的記載がある。今後はこの記載の解析を進めていくとともに、今回の数量的記述については他の文献との整合等によってその実態を検証しつつ、さらなる分析につなげたいと考えている。

6. 謝辞

「偵察録」の存在を知り、調査解析を最初に始めたのは10年ほど前からであり、今回の報告に至るまでには多くの方々に御支援・御協力を頂いた。特にマイクロフィルム原版のコピーにおいては千葉県立中央図書館に多大な御協力を頂いた。またマイクロフィルムの原版のコピー作業からその資料整理と情報のデータベース化、さらに解析作業においては、川島保氏、加藤典子氏、宮川治郎氏、稲葉隆夫氏、山口和子氏、石崎晶子氏に大変お世話になった。皆さまに厚く御礼申し上げます。

7. 引用文献

- 秋道智彌．2010．コモンズの地球史．319pp．岩波書店．
 千葉県史料研究財団（編）．1999．千葉県の歴史別編民俗1（総論）．676pp．千葉県．
 早川庄八．1974．日本の歴史4：律令国家．

中村俊彦・小島由美

454pp. 小学館.

松木武彦. 2007. 列島創世紀. 366pp. 小学館.

国分拓. 2010. ヤノマミ. 315pp. NHK 出版.

中村俊彦. 2004. 里やま自然誌. 128pp. マルモ出版.

中村俊彦. 1999. 農村の自然環境と生物多様性. 遺伝 53(4) : 56-60.

中村俊彦・北澤哲弥・本田裕子. 2010a. 国連ミレニアム生態系評価 (MA) 及び日本における里山・里海のサブグローバル評価 (里山里海 SGA) プロジェクト. 千葉県生物多様性センター研究報告 2 : 3-12.

中村俊彦・北澤哲弥・本田裕子. 2010b. 里山里海の構造と機能. 千葉県生物多様性センター研究報告 2 : 21-30.

直江広治. 1958. 垣内の研究. 東京教育大学文学部紀要 16 : 1-32.

直江広治. 1960. 垣内の研究 2. 東京教育大学文学部紀要 26 : 1-23.

日本の里山・里海評価. 2010. 里山・里海の生態系と人間の福利：日本の社会生態学的生産ランドスケープ (概要版). 国際連合大学. 沼田眞 (編). 1996. 景相生態学. 178pp. 朝倉書店.

ロビン・ダンバー (松浦俊輔・服部清美：訳). 1998. ことばの起源・猿の毛づくろい. 292pp. 人のゴシップ. 青土社.

佐藤悦. 1986. 「偵察録」について. 33pp. 柏書房.

渡辺尚志. 2004. 遠くて近い江戸の村. 203pp. 崙書房出版.

山澄元. 1982. 近世村落の歴史地理. 313pp. 柳原書店.

吉田正彦・宇野晃一・山口和子・石崎晶子・小倉久子・中村俊彦. 2010. 千葉県における里沼の恵みと人々の営み. 千葉県生物多様性センター研究報告 2 : 114-140.

著 者：中村俊彦 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 千葉県立中央博物館 nakamura@chiba-muse.or.jp ;
小島由美 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 千葉県立中央博物館内 千葉県生物多様性センター
生命 (いのち) のにぎわい調査団

"The structure and productivity in Japanese village of SATOYAMA-SATOUMI in the Meiji Era" Toshihiko Nakamura, Natural History Museum and Institute, Chiba, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan. E-mail: nakamura@chiba-muse.or.jp; Chiba Biodiversity Center, Chiba, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan.